11）単純性骨嚢胞の２例

○平野　千鶴，宮島　　久，馬庭　暁人
強口　敦子，海老原寛子，大友　友昭
小澤　幸恵，古田　摂夫，大溝　裕史
（会津中央病院歯科口腔外科）

単純性骨嚢胞は，外傷性骨嚢胞，弧在性骨嚢胞，出血性骨嚢胞などとも呼ばれ，嚢胞壁に被覆上皮を有していない偽嚢胞の１つで，長官骨，特に上腕骨および大腿骨の近位骨幹端部に好発し，顎骨に発症することは比較的稀な疾患である。今回演者らは，16歳男性の上顎前歯部と，14歳男性の下顎前歯部に発症した単純性骨嚢胞の２例を経験したので，その概要を報告した。

（症例１）16歳，男性。左側上顎前歯部の疼痛を主訴に当科受診。当院耳鼻科受診時MRI検査にて左側上顎前歯部に病巣を認めたため当科を紹介，受診となった。初診時口腔内は，左側上顎前歯部にはっきりとした発赤や腫脹はなく，う触も認めなかった。同領域の歯は全て生活歯であったが，打診痛，圧痛，自発痛を認めた。X線検査にて左側上顎前歯部根尖相当部より鼻腔にかけての境界不明瞭なX線透過像を認めた。術前に病巣に近接する歯の根管治療を行った後，全身麻酔下に掻爬と歯根端切除術を施行した。病理組織学的所見は上皮の裏装を欠いた炎症性の肉芽組織であった。

（症例２）14歳，男性。下顎前歯部の疼痛を主訴に当科受診。下顎前歯部の疼痛にて，近歯科医院を受診。その際，X線検査にて同部位に嚢胞様透過像を認めたため当科を紹介，受診となった。初診時口腔内は，下顎前歯部歯肉頬移行部に軽度の発赤と腫脹を認めた。同領域の歯には打診痛を認めたが，全て生活歯であった。X線検査にて病巣は類円形で近接歯の根尖とは一層の骨で境されているような所見であった。正中下顎嚢胞の臨床診断のもと全身麻酔下にて手術を施行。病理組織学的所見は，上皮の裏装を欠いた炎症を伴う線維性組織であった。現在，２症例とも術後１年弱を経過するが特に異常所見はなく，X線所見にて空洞部は骨の新生を認め，経過は良好である。

12）顎放線菌症の２例

○海老原寛子，宮島　　久，馬庭　暁人
強口　敦子，大友　友昭，平野　千鶴
小澤　幸恵，古田　摂夫，大溝　裕史
（会津中央病院歯科口腔外科）

顎放線菌症は，近年の抗生物質の使用状況から定型的な症状を示す症例は減少し，放線菌塊の検出率も低下している。今回，演者らは広範な下顎骨骨髄炎の病巣内と智歯周囲炎に継発した病巣に放線菌塊を認めた２例を経験したのでその概要を報告した。

（症例１）61歳の女性。平成13年２月８日，義歯作製を希望し当科受診。通法に準じ上下顎総義歯を作製。装着直後より両側下顎臼歯部の疼痛を訴え，義歯調整を行うも症状は消失せず。下顎前歯部に潰瘍が形成され，義歯未装着で経過観察するも改善傾向を示さず，臼歯部にも潰瘍を形成し始めたため，一部の骨を開放した。骨髄より排膿を認め，骨髄炎と診断。その後，全顎に及ぶ骨髄炎手術を施行した。骨を削去し，可及的に感染している海面骨を掻爬，病巣の除去を行った。摘出物の病理組織所見より放線菌症の病理診断を得た。術後，一部骨が露出したが化学療法および局所洗浄処置にて上皮化した。

（症例２）62歳の女性。平成14年８月27日初診。初診の約２週間程前に右側上顎智歯周囲に急性症状を認め，紹介元にて消炎処置を施行。急性症状が改善したため，抜歯目的に当科紹介，受診となった。当日，外来にて局所麻酔下に抜歯術を施行。歯牙周囲に病巣を認めたため，同部の摘出および腫瘍性疾患も疑い病理検査を行ったところ，放線菌症の病理診断を得た。その後，上皮化の状態は良好で２ヶ月半たった現在，経過良好である。

13）*Streptococcus vestibularis*との共存による*Candida albicans*の菌糸体形成について

○橋本　勝一，新田　敏正
（奥羽大・歯・細菌）

（目　的）　*Candida albicans*は*Streptococcus salivarius*と共存すると菌糸体を顕著に形成することをすでに報告した。今回はMitis-salivarius平板培地（MS培地）を用いて分離した菌株に